



出典：松本市有毒ガス中毒調査報告書（平成7年）

原因物質の分析であるが、実は、事件発生の翌日には長野県衛生公害研究所（当時）において池の水を溶媒抽出し GC/MS にかけて分析結果が出ており、「サリン」と特定されていたのであるが、分析担当者が化学兵器として使用されるサリンとは到底信じられず、試料を国立医薬品食品衛生研究所に送付、再分析を依頼している。しかし、そこでの結果もサリンと特定され、長野県警科学捜査研究所においても同様の結果を得たことから事件発生から1週間後に原因物質がサリンであると発表されるに至った経緯がある。筆者はその後当時の分析担当者と話をする機会を得たが、「標準物質がない中でサリンと特定するには相当の苦労があっ

た。」と回想されていた。

原因物質がサリンであると発表された後、犯人像が取りざたされたが、長野県警は第一通報者である河野氏を重要参考人として取り調べるに至った。その要因としては河野氏の自宅から通常では保有し得ない多種の化学物質が押収されたことに起因する。そのリストは以下のとおりである。

押収日 94年 6月28日	シアン化カリウム（褐色ビン）	1本
	プリントシーラー（透明ビン）	1本
	比較電極補充溶液	1本
	STEEL（ビン入り）	1本
	AgNO ₃ のラベル付き黄色ビン	1本
	AgNO ₃ のラベル付きビン入り薬品（フタなし）	1本
	アルミニウム（褐色ビン入り）	1本
	二硫化モリブデン（ビン入り）	1本
	スミチオン粉剤	1本
	アルミニウム（透明ビン入り）	1本
	Lodi ne	1本
	Si lver Cyani de（褐色小ビン入り）	1本
	比較電極補充易	1本
	硫酸銅（結晶）	1本
	金属アンチモン（粉末）	1本
	ビスマス（透明ビン入り）	1本
	塩化第一銅（褐色ビン入り）	1本
	ニッケル（粉末）	1本
	Ni ckel Hydroxi de（緑色ビン入り）	1本
	一酸化鉛（褐色ビン入り）	1本
銅（褐色ビン入り）	1本	
酸化クロム（緑色ビン入り）	1本	
シアン化銀（ビン入り）	1本	
6月30日	殺虫剤（カルホズ 100ml）	1本
	缶（「フレオン TF」と記名あり）	3本
	展着剤（ダイン 100ml）	1本
	殺虫剤（スミチオン 100ml）	1本
7月5日	超音波洗浄用洗浄液	2缶

出典：「オウムの生物化学兵器」石倉俊治著 読売新聞社

「サリン事件」Anthony T. Tu 著 東京化学同人 から一部改変

松本サリン事件の後、警察から化学学校にも問い合わせがあり、装備研究科研究員の一部に当該リストが提示されたようである。警察担当者から前述のリストを提示されサリンが作れないか聞かれたようで、見た瞬間に「無理です。」と回答したところ、「なんとかありませんか？」と言われ返答に窮したと苦笑いしていた先輩の顔を思い出す。

筆者も当時教育部技術教官として勤務しており、学生（と言っても部隊に帰れば中堅の幹部である。）から「河野さんは犯人ですか？」と質問があり、「ほぼ 100%犯人ではない。」と回答していた。「では教官が予想する犯人像は？」と更に問われ以下のように答えていた。

「少なくとも大学以上で専門的に有機合成を学んだことのある人間が、自由に薬品が入手できる実験設備の整った環境にいないとできない。従って河野さんは犯人である可能性はほとんどない。」後になってオウム真理教が実行犯と判明した際、当該学生から「教官。本当は裏情報知ってたんでしょ？」とからかい気味に言われ、回答に窮したのを思い出す。なお、後知恵ではあるが、仮に一会社員がサリンを作成可能な能力を有していたとしても、現場で使用されたサリン推定量を合成するにはあまりに大きなギャップがある。専門的に言えばマススケールが合わない。筆者もサリン合成に携わった経験があるが、合成に必要な材料を入手するだけでも相当の資金が必要となる。それに加えて実験設備や薬品管理等、個人では到底実行不可能であり、河野氏を犯人とする主張は科学的合理性を全く無視した暴論に等しいと言わざるを得ない。

第 6 節 松本サリン事件から地下鉄サリン事件までの間

松本サリン事件以降、捜査は継続されたが、焦点がオウムに向かうきっかけとなったのは上九一色村での異臭事案からである。1994年7月、上九一色村オウム関連施設第7サティアン近傍で異臭事案が発生、同年10月初旬には長野県警の捜査員が第7サティアンの横を流れる小川の土壌を採取、同試料を警察庁科学警察研究所に運び込む。また、並行してサリン製造に必要な薬品の販売ルートを詳細に洗い出していた。11月中旬、科学警察研究所からの鑑定報告書が長野県警に届けられ、その結果、サリン合成にあたって発生する副生成物メチルフォスホン酸ジメチルが検出されたことが明らかとなる。

一方、陸上自衛隊のヘリ部隊は上九一色村の上空を飛行中、オウム関連施設内にソ連製の軍用ヘリ「ミル17」を確認している。この視認情報は陸幕調査部に報告され、調査部は密かにオウムに関する情報収集にあたった。その中で、第7サティアンと呼ばれる施設から特殊な設備があることが確認された。その写真は、まさに大規模な化学プラントに備え付けられるスクラバーとみられる写真であった。関連写真を下に示す。写真中央の大規模施設が一般信者の宿泊施設である第10サティアン、右斜め下の施設が第7サティアン、第7サティアンの左、中央下部のプレハブ施設が実際にサリンが合成されたクシティガルバ棟である。また、写真左、第10サティアンに隣接するプレハブ施設がジーバカ棟で生物剤関連の実験が行